

【論文】

「東亜同文書院調査報告書再読」試論 —フフホト調査の意味を兼ねて—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章

はじめに

本稿は、現在愛知大学東亜同文書院大学記念センターにおいて進めていこうとしているプロジェクト研究の見取り図の一例である。本記念センターの研究は、文献研究とフィールドワークという地域研究の基本に根差し、これまでに多くの成果を上げてきた。そして今後も、東亜同文書院の中国における教育と研究を検証、再検討し、その現代的意義を探り、今後の研究の方向性を見出すことを課題としている。その第一歩として、以下に示すような書院生による「卒業大旅行」報告書、日記、さらには指導教員の記録などを再読し、21世紀の現状と対比することを課題に挙げている。

20世紀前半、上海にあった東亜同文書院では、周知のように創立の最初期から卒業年次の学生たちを、近い将来彼らが活躍する世界である中国を中心としたアジア各地に向けて、見聞を広めさらに実地の社会経済調査を行うために、派遣した。これを「卒業大旅行」と呼ぶ。「卒業大旅行」については、すでに後掲の藤田佳久による網羅的な研究や谷光隆による地域や問題を絞った研究がある⁽¹⁾。そして、藤田のもの是一般書としても刊行され、本学以外の場でも文壇あるいは論壇においてしばしば取り上げられるなど、社会的認知を受けていると言っても過言ではあるまい⁽²⁾。

学生たちの卒業研究および実習として展

(1)藤田佳久編著による『東亜同文書院・中国調査旅行記録』はこれまでに5巻刊行されている。第1巻『中国との出会い』愛知大学、1994年、第2巻『中国を歩く』愛知大学、1995年、第3巻『中国を越えて』大明堂、1998年、第4巻『中国を記録する』大明堂、2002年、第5巻『満州を駆ける』不二出版、2011年。また、藤田に先立つ谷光隆編によるものは『東亜同文書院大運河調査報告書』愛知大学、1992年3月、『東亜同文書院阿片調査報告書』あるむ、2007年4月などがあり、藤田のものが卒業旅行研究であるのに対し、谷は大運河の地域研究とアヘン問題に焦点を絞った実態解明である。

(2)藤田佳久『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』、中日新聞社、2012年4月。藤田は、『中日新聞』に連載したものをまとめ直して上梓している。内容は、東亜同文書院設立の経緯に始まり、戦後の日中関係において活躍した同文書院OBにまで筆が及んでいる。学部に入學したばかりの学生にとって、自分たちの先達について学び、大学への帰属意識を涵養するのに適した書物となっている。また、栗田尚弥『上海東亜同文書院一日中を架けんとした男たち』新人物往来社、1993年12月、さらに沖繩出身で自身が1943年に書院に入學した経験を持つ大城立裕による『朝、上海に立ちつくす—小説東亜同文書院』講談社、1983年、文庫版は中公文庫1988年6月がある。後2者はいずれも、同文書院生そのものとその時代に焦点をあてたものであり、本稿の意図に必ずしも沿うわけではないが、その背景については共通の視角を有しているといえよう。なお、本稿執筆中に黄英（中国海洋大学助教授）による論考「大城立裕「朝、上海に立ちつくす」におけるアイデンティティ」（九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会“Comparatio”18号、2014年12月）が公開されているのを知った。同論考では、大日本帝国臣民であり本土に侵略された沖繩という加害と被害の二重性を持つ大城のアイデンティティが、上海での体験によってどのように変容したのか、具体的には稀薄化されたのかについて論じている。東亜同文書院の学生は、「本土」に限らず大日本帝国の版図あるいは影響下にあった地域から参集していたのであり、それをまた同文書院もセールスポイントとしていた。さらに、中華学生部が一時期存在していたわけであり（水谷君子「東亜同文書院に学んだ中国人—中華学生部の左翼学生」、『近きに在りて』第28号、1995年11

開された「卒業大旅行」は、東亜同文書院の教育の成果を示すものであり、さらに戦前日本の社会科学的研究の一翼を担った東亜同文書院の中国・アジア研究の土台となった。学生たちは、自ら旅行、調査の計画を立て、戦後には『中国のギルド』で学士院賞を受賞することになる経済学者根岸佶⁽³⁾の、さらに後には地理学者馬場鋏太郎⁽⁴⁾ら書院の教員の指導を受けて事前の文献調査を行った。「大旅行」の現地では行政機関などの保護を陰に陽に受けていたが⁽⁵⁾、これは東亜同文書院の活動が民間組織ではあるものの当時の日本政府と深い関係にあり、資金的にも支援を受けていたことが大きい⁽⁶⁾。「卒業大旅行」に当たっては、同文書院学生は当時の清朝政府・民国政府からヴィザを発行されており、現地官憲の保護が法的には保障されていた。もちろん、これが、彼らの身の安全を全面的に保障するものではなかったことは言うまでもないが、学生にとっては

一定の精神安定剤ともなったはずである。また、当時の東亜同文書院と中国政府、すなわち清朝政府から中華民国北京政府、やがては南京政府との公式の関係が一定以上の配慮がなされる関係にあったことを物語っている⁽⁷⁾。しかしながら、これはまた、歴史状況からやむを得ないことではあるが、官による保護の下での調査に必然的に由来する限界を当初から内包していたことでもある。

それでも、実際に足を運んだ中国各地の人々とできるかぎり直に触れ合い、自らの目で風土や地誌を確認し、民情や商習慣、農業など諸産業の生産状況、生産構造や市場構造などを確認し、書院で学んだばかりの知識と技術を駆使して調査し、帰着後に旅行日誌と報告書を提出したのである。それらは、フィールドワークの先駆として、調査当時においても、また現在においても高く評価されている⁽⁸⁾。

月、『東亜同文会史論考 財団法人霞山会創立 50 周年記念出版』霞山会、1998 年 6 月再録)、同文書院の持つ多様性を単に「複雑」で片を付けてしまってはならないこと、近代日本のそれこそ「複雑」な膨脹が背景にある事など、同文書院研究の課題の底なし状態を感じさせるものではないだろうか。

(3)根岸佶については、拙編『根岸佶著作集』全 5 巻、不二出版、2015 年 8 月～2017 年 11 月各巻解説参照。

(4)馬場鋏太郎、東亜同文書院第 5 期生、地理学者。中国長江流域の水運調査などを行う。

(5)なお、彼らが得たヴィザ＝「護照」の実物は、愛知大学東亜同文書院大学記念センターに展示されている。

(6)このことは、以下の史料でも確認できる。「東亜同文書院関係雑件 第 2 巻」所収の「2. 一般」の中には、大正 11 年 11 月 26 日付文書として大正 9 年度実施の東亜同文書院第 14 期生による旅行報告書が総目録と共に提出されたことが記されている (JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015332600、(H-4-3-0-2_002)(外務省外交史料館))。さらに、東亜同文書院の設立経緯をたどれば劉坤一を始め、清朝高官との関係が浮かび上がってくるのであり、国家間の公式な外交関係を踏まえて設置運営されていたことが了解できる。それゆえの「護照」の発行であり、官憲の保護も当然付くのである。不平等体制下におかれたという状況は続く中華民国でも継続するのであり、両国の国家関係がそれなりに良好である限り持されたとみるべきであろう。もちろん、このことと中国奥地の治安がいかなる状況にあったのかは、無関係である。また、辛亥革命前後、孫文支援などもこうした文脈から考えねばならないのではないだろうか。同文書院関係者による革命支援は、清朝が存続する限り反政府運動への加担である以上、公式に行えるはずがない。結果的に孫文が臨時大総統になったとしても、失脚してしまえばまた、公式な支援を行うことは、政府の関係機関である以上、不可能である。

(7)これは、日中戦争期になると対日協力政権であった汪政権との関係になる。日中戦争期に中国内部の卒業旅行範囲が限定されてくるのは、言わずもがなであるが、日本が承認している政権の実効支配地域にそれが限られるからである。

(8)Douglas R. Reynolds, “Chinese Area Studies in Prewar China: Japan's Toa Dobun Shoin in Shanghai, 1900-1945” :The Journal of Asian Studies, Vol.45, No.5, (Nov.1986)の今や古典的となった論考参照。なお、Reynolds には、近代日中関係を捉え直そうとする “East Meets East: Chinese Discover the Modern World in Japan, 1854-1898. A Window on the Intellectual and Social Transformation of Modern Japan. 2014、 Asia Past

近年、中国でも東亜同文書院の中国研究への関心が高まり、イデオロギー面での批判を伴いながら⁽⁹⁾、そこから1つ段階を越えて調査資料を選択し、翻訳出版する作業も行われるようになった⁽¹⁰⁾。

書院生の「大旅行」とその成果である調査報告書が、当時の主たる調査対象地域であった現在の中華人民共和国の中国国家図書館によって手書きの書類を含んだまま影印本として翻刻され、刊行された⁽¹¹⁾。これは東亜同文書院が上海から引き揚げる際、他の多くの資料と共に中国側から持ち出しを禁じられ、やむなく現地に残してきた資料である。東京の東亜同文会などに事前に送られていた報告書類は、その多くが愛知大学創立時に基本図書の一部として所蔵されている。しかし、大戦末期の交通状況から、すべてが日本に送り届けられたわけではな

い。そのため、近年中国で復刻されたものと合わせて、はじめて内容的にはほぼコンプリートなものになる。また、中国国家図書館による翻刻が影印本であったことは、書院生の報告書・日誌などが一次史料⁽¹²⁾にかなり近い形のものとして活用できることを意味する⁽¹³⁾。

こうしたことは、中国側から言えば日本帝国主義批判の姿勢を維持しながら、調査の成果を活用しようということであり、調査を行った人々の後裔である我々としては、調査の意義と限界を考えるよい機会であるといえよう。

I 20世紀前半の中国調査の意義

「改革開放」開始後の中国では、とりわけ1990年代以降、満鉄による調査刊行物の漢語への翻訳刊行⁽¹⁴⁾、日本が占領下の華北で

and Present: New Research from AAS (Book 12)がある。同書は、中国の外交官を含む政府高官たちの日本経験が、初めて世界というものを発見する契機となったこと、これが辛亥革命後にも継承されたことの実証を試みる700頁以上の大著である。

(9)例えば、史桂芳『“同文同種”的騙局 日偽東亜連盟運動的興亡』社会科学文献出版社、2002年12月。史桂芳に従えば「同文同種」の思い込みは、日本からはアジア主義の一方的理解を押し付けることになるであろうし、中国側でナショナリズムを意識した人びとからすれば、「ペテン」と後世見做されたであろう。東亜連盟の掲げた「アジア主義」を、真っ向から拒絶する議論である。

(10)中国社会科学院中日歴史研究中心『東亜同文書院中国調査資料選訳 上・中・下』社会科学文献出版社、2012年11月。本書の翻訳グループには、愛知大学現代中国学部創立時に教授として籍を置いていた馮天瑜、現在同学部教授の劉柏林が名を連ねている。本書は全3巻、1649頁という大冊である。内容は、2012年段階で愛知大学図書館において公開されていた『清国商業綜覧』などの資料や、上述の本学文学部谷光隆教授による『東亜同文書院大運河調査報告書』が中心である。イデオロギーによる批判から距離を置いた資料の紹介として、1つの転換点となるのではないだろうか。

(11)中国国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』中国国家図書館出版社、2016年8月。本書は全200巻という大部なものであり、翻訳刊行ではない。

東亜同文書院は、1945年の敗戦によって廃学となり、上海から引き揚げざるを得なかった。引揚げに際して、文献を含め一切の資料の持ち出しが禁じられ、当然学生による「大旅行」の報告書類も現地に残さざるを得なかった。要するに接收されたのである。中国国家図書館版は、この接收文物を復刻刊行したものであり、東亜同文会の後継団体である霞山会にも、また東亜同文書院大学の後継大学でもある事を認識している本学に対しても、何等の事前のこわりはなかった。なお、愛知大学はその設立経緯から在外高等教育機関の教員学生の受け皿となったが（これ自身が、まだ研究の緒についたばかりではある）、当初の基本図書として「霞山文庫」と称する霞山会関連資料があり、また東亜同文会に送られていた報告書などが存在していた。これらは、既にマイクロフィルム化され、オンデマンド版での覆刻も随時行われている。

(12)「一次史料」が何より大切である事は言うまでもない。影印されたものは、その点から一次史料に近いといえるが、現物ではないため、やはり二次史料である。万年筆などで書かれた場合、インクがのらずに別の文字になることなどがあり、判読結果に影響が出る。これは、筆者自身の経験から断言できる。

(13)さらに、本稿執筆中、愛大所蔵分についても中国国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊続編』中国国家図書館出版社、2017年12月に刊行されたことを知った。全250巻。

(14)解学詩主編『満鉄史資料』第2巻「路権編」中華書局、1979年、第4巻「煤鉄編」中華書局、1987年

実施した農村慣行調査地域の現状との比較を踏まえた再調査⁽¹⁵⁾などが行われている。これらは、繰り返しになるが、帝国主義の後ろ盾があったにしても、調査は調査であり、その成果を再発見しようという試みである。言うならば、戦争と革命による社会的混乱時期の中国社会の実情を把握し直し、21世紀の現在の課題解決につなげようという試みである。すなわち、「改革開放」70年、「韜光養晦」から「大国崛起」へと舵を切り、「一帯一路」によって世界的な経済政治の覇権を握ろうとする中国にとって、もっとも脆弱な国内の社会経済基盤を固め直すには、いかに比率が下がりつつあるとは言え、半分近くの人口が住む農村をないがしろにはできないという、さしせまった政治的社会的

的要請があるからであろう。

【戦前中国の農村調査の紹介】

中華民国時期の中国自身による各種調査は、1928年の国民党による中国統一後、国民政府行政院農村復興委員会が省を単位に実施した農村調査がある。しかし、調査そのものは国民政府の統治状況を反映して全国、あるいは省内でも全省を網羅し得たわけではない。従って、公刊されているその報告書⁽¹⁶⁾も一部の省の、しかもサンプリングでしかないが、調査および分析の質は極めて質の高いものである。また、梁漱溟などによる河北省定県・山東省鄒平県での郷村建設運動の過程での調査や、李景漢らによる同じく河北省定県の調査⁽¹⁷⁾、定点観測としては費孝通による浙江省開弦弓村における調査

はその一例である。なお、解学詩は『満洲国機密経済資料』全12巻を本の友社より監修解題で刊行し、さらに解学詩は日本人研究者松村高夫・江田謙治との共同作業として『満鉄労働史の研究』日本経済評論社、2002年4月に出版している。また、組織的な日本関連資料の翻訳刊行としては、中央檔案館・第二歴史檔案館・吉林省謝意科学院共同編集の『日本帝国主義侵華檔案資料選編』中華書局、2019年1月現在16巻が刊行されているが、原典影印ではない。

(15)農村慣行調査に関しては、日中共同研究として再調査が行われ、その成果も刊行されている。その代表例として三谷孝の仕事が挙げられる。『農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録』(編著)内山書店 1993年

『戦前期日本の中国秘密結社についての調査』科学研究費補助金研究成果報告書 1998年

『戦前期中国実態調査資料の総合的研究』科学研究費補助金研究成果報告書 1998年

『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録』(編著)汲古書院 1999年

『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録 第二巻』(編著)汲古書院 2000年

『村から中国を読む——華北農村五十年史』(共著)青木書店 2000年

『秘密結社と中国革命』中国社会科学出版社 2002年

『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究』一橋大学 2005年

『戦争と民衆：戦争体験を問い直す』(編集代表)旬報社 2008年

『中国内陸における農村変革と地域社会』(編著)御茶の水書房 2011年

『二十世紀華北農村調査記録』(共編)社会科学文献出版社 2012年

(16)行政院中国農村復興委員会による調査報告書は、江蘇・浙江・河南・雲南・陝西・広西の6省について翻刻されており、容易に見ることができる(原本は『江蘇省農村調査』商務印書館、1934年7月など)。調査は南京国民政府が比較的安定していた1930年代に実施され、全体として統一されたフォーマットにまとめようとする努力が見られる。

(17)例えば、李景漢編著『定縣社會概況調査』中華平民教育促進會、1933年2月。本書は河南省定県における「農民生活の中に問題を探り、文化教育、生活教育、衛生教育および公民教育の活動を進めることで、農民の必要とする教育と農村基本建設とを完成させる」(1頁)ことを目的とする実験のために、具体的に農村調査を行った社会学的調査の好例である。これは、同書に対して平民教育促進課で活動した教育学者である晏陽初の序からの引用であり、調査の目的などが明確に記されている。筆者が参照したのは、1986年3月に中国人民大学出版社より再刊されたもので、再刊にあたり「李景漢教授簡歴」「李景漢著作目録」が附されている。また、上海人民出版社より2005年5月に再刊されるなど、版を重ねている。なお、人民大学出版社版の「再刊序」では、李景漢の定県調査が当時の社会学的的方法による中国人による中国調査の代表例であり、「改革開放」以来の変化を理解する為に有用である事を挙げている。李景漢(1895-1986)とその社会調査の意義については、穂山新「近代中国における社会調査の実践と困難：李景漢の社会調査論と中国農村社会」(『社会学ジャーナル』第41号、2016年3月)がある。

(18)など、国際的にも高い評価を得ていたものも多数にのぼる。これらには、現実に民国中国が直面していた農村、そして農村社会をいかに近代化するかという問題意識が根柢にあった。そうした調査に関わっていた陳翰笙・馮和法・巫宝三・薛暮橋・孫治方などは、日本の農業経済学者天野元之助等とも親交を結び、時に意見の交換を行っている。書院生同様、中国の大地を自らの足で歩いた天野も、彼らの仕事を評価し、『支那農業経済論』⁽¹⁹⁾や『中国農業の地域的展開』⁽²⁰⁾の中でそれに言及している。

戦前期中国における農村調査はかなり広範囲行われた。その主体の1つが「満鉄調査部」であり、それに対する研究はすでに汗牛充棟の状態である⁽²¹⁾。上述の天野に関しても、研究を回顧した記録が出版されており⁽²²⁾、そこでも聞き取り調査の意義と難しさ、特に公権力を背後にした場合の誤解の発生について指摘する。また聞き取り対象に関しても、華北農村調査での家族制度に

関する聞き取りでは「仁井田陸君がペテンにかけられてしまいましたよ」⁽²³⁾と述べ、地方郷紳が自らの理想とするイメージを語っていることを、当時の慣行と勘違いしたと例として指摘している。こうしたことも、中国の研究者との緊密な交流と同時に天野が行っていた足を地に着けた調査研究のなせる業であろう。また、天野は明治から大正という時代に育ち、漢学とリベラリズムの風潮の中で知的世界を構築してきた。これは、上記の初期東亜同文書院教授であった根岸佶の次に来る世代であり、中国認識も相違があつて当然である。なお、天野は満洲国成立直前の1932年1月に十河信二を委員長に成立した満洲経済調査会の第一部満洲経済班主任として参加するが、天野を除く班員4人のうち「中国語がしゃべれるのは、東亜同文書院出の石田七郎君だけでした」⁽²⁴⁾と証言する。石田は、満鉄給費生として1930年に同文書院を卒業している⁽²⁵⁾。今後の書院研究の方向性として、こうした書院

(18)小島晋治ら訳『中国農村の細密画：ある村の記録1936～82』研文出版、1985年12月容易に見ることができる。なお、費孝通の社会学的農村調査は中国農村研究の必須文献であり、とりわけ『郷土中国』と『江村経済』は極めて重要である。費孝通の主要著作は『費孝通文集』に収録されている。

(19)天野元之助『支那農業経済論 上巻』改造社、昭和15年7月、2～10頁。同書は、『改訂復刻版 中国農業経済論』全3巻、龍溪書舎、1978年8月として天野自身の手による誤字訂正書き込み後、覆刻されている。

(20)天野元之助『中国農業の地域的展開』龍溪書舎、1979年9月。陳翰笙など、中国の研究者、調査マンとの交流の成果が各所に記されている。天野は、同文書院生同様、自らの足で中国農村を歩き、自らの目で見、農民に話しかけ、大著を著した。生前、わずかながら警咳に接する機会があつたが、とにかく理屈よりも実証、資料を重んじる姿勢は忘れられるものではない。

(21)その先駆とも言うべき小林英夫『満鉄調査部』（吉川弘文館、1996年9月）は、2015年4月に講談社学術文庫として容易に手に取れるようになっている。また、1980年代には草柳大蔵『実録 満鉄調査部』（朝日新聞社、1979年）があり、かなり話題となった。

(22)天野弘之・井村哲郎編『満鉄調査部と中国農村調査 天野元之助中国研究回顧』不二出版、2008年8月、など。同書は、天野を囲んだ福島正夫、野間清による鼎談記録などをおさめたものであり、天野と中国の各研究者との交流、満鉄調査の評価など多岐にわたる情報が取められている。なお、本書には「私は速記を稽古しておったものですから……」（11頁）とあり、同書の解題で井村氏が指摘しているように、天野が「調査や旅行の際に膨大なメモ、フィールドノートを残している」理由とする。これは、その水準はともかく、同文書院生の報告書、日記類についても類似のことはうかがわれる。

(23)同前書、181頁。仁井田陸は『中国の農村家族』東大出版会、1952年8月を出版している。前掲『満鉄調査部と中国農村調査』では、仁井田氏の農村家族理解のことを指している、としている。

(24)前掲『満鉄調査部と農村調査』32頁。

(25)同前書、310頁。石田は、後に満鉄調査部事件に連座し、仮釈放の後1945年6月応召、シベリア抑留中に死亡した。なお、書院の同期生に尾崎庄太郎がいる。天野の評価によれば、石田は山田盛太郎よりも「左翼ばりのもの」（同前書、69頁）を書いていたという。

卒業生が書院で学んだもの、その現実の研究での適用が課題となるが、石田の満鉄調査部での存在および石田を評価する天野の視覚は念頭に置いておくべきであろう。

とはいえ、民国期の国民政府、また民間の中国人研究者による調査は、かれらにとっても必ずしも満身に網羅的にかつ全面的に行えなかったのが現実であった。その経緯には、共産党との内戦という国内事情に止まらず、いやそれ以上に日本との戦争という外部的要因が厳然として存在する。さきの華北地域での農村慣行調査も日本の植民地支配と不可分であり、調査としての有用性を主張するにしても、手放しの評価は禁物であろう。そうした歴史的責任を、現在の日本の中国研究者としても避けて通ることは出来ない⁽²⁶⁾。

【同文書院による中国調査と研究】

「卒業大旅行」による中国を中心とするアジア各地の調査は、逸早く西欧の商習慣などになじもうとした日本と異なり、独自の世界を長らく築いてきた中国をはじめ、前近代的要素を色濃く帯びた地域の、近代に直面して変容を迫られる実態⁽²⁷⁾を把握し、日本の経済活動に資することを目的としていた。具体的には、異なる商習慣、地域社会の構造などへのまなざしがあった⁽²⁸⁾。それゆえ、根岸は自ら中国の商店に住みこみ、使用人として働き、実地に帳簿類の付け方、商

品の扱い方などを体得したのである。その成果が『商事に関する慣行調査報告書—合股の研究—』(1943年)であり、それに先立つ『支那ギルドの研究』(1932年)であった。その根岸佶が中国研究の道に飛び込むのであるが、そのきっかけとなった日清貿易研究所設立に関わる荒尾精の演説は次のようであったという。

扱て私が研究したる第一の問題、即ち従来日清貿易に關係せる日本人が、概ね蹉跌したる原因は、何れにあるかと云ふに、日本人中同地に渡江し、支那人と直接に貿易を試みるに適當の資格を備ふるの商人なきに帰せねばなりませぬ、……次に第二の問題なる支那商の技倆に關し、日本人が一己の私利に眼眩みて、公益を顧みず、一時の便誼から彼等に安賣りをして、爲めに物價の權衡を失する弊害に説き及ぼす積りなるが、……扱て第三問題たる従來の失敗を挽回するの矯正策に轉じますが、此矯正の方法と申しますは、……どこまでも實地に當り、現物にて苦心するところなくては、差當り役に立ちませぬ……其研究生を日本人のみに限らず、普く亜細亞州内の諸邦、即ち支那朝鮮安南暹羅緬甸印度等より、俊秀の青年を募り、外は我國旗が亜細亞の各港に飄し、内は殖産興業の發達するありて

(26)上記の天野も「幾ら満洲国ができたといっても、これは日本の植民地のようなものです。満鉄沿線を量の間代わりにして、日本の生活をするようなものでした。しかし、中国本土を見てから、私は、大連での中国研究というのは隔靴搔痒の感があって、ばかばかしくてできない」と思うようになった、と述べる(同前書、69頁)。

(27)ここでは煩瑣になるので深くは検討しないが、「近代」の意味を論ずることになると、かなりの手続きが必要となる。東亜同文書院の学生教員が直面した課題は、一言で言えば、近代西欧世界との接触開始の時期は大差がなかったものの、その後の対応によって50年ほど大きく異なってしまった日中両国の社会経済環境にどのように対応するか、ということであった。

(28)東亜同文書院最初期の教授であった根岸佶は、こうした「大旅行」の企画立案、実施に関わり、その成果は本文中に言及した『支那省別全誌』前半のみならず、彼自身の著作である『中国のギルド』『商事に関する慣行調査報告書』などに集約されている。根岸の業績に関しては、上掲拙編『根岸佶著作集』各巻に付された解題参照。

始めて我日本の國威を海外に耀し、一國經濟の基礎を鞏定し、亜細亞貿易の牛耳を執りて、東洋の英國たらしむるを得ると得ざるも、此生徒の奮發如何に在りて判ざる儀なれば、其身體も強壯ならざる可からず、其精神も堅忍ならざる可からず、斯る生徒を得んとするに當たりては、素より單に一片の廣告に依頼し、座して其人を得んとするが如きは、決して策の得たるものにあらずと自信し、之が爲めに私は斯く内地を巡迴して生徒募集に奔走するところであります⁽²⁹⁾。

ここで荒尾が述べることは、実地での中国研究であり、実学としての中国研究であ

った。それはまた、近代日本の危機意識の現れでもあったのである。

ここに端を発する中国研究は、『支那省別全誌』にまとめ上げられ、さらに調査を重ねて『新修支那省別全誌』として刊行された。さらに並行して、中には『支那省別全誌』の基礎資料ともなった多くの調査報告書を残すことになった。もちろん、清末民国初期に開始されたこうした調査のための大旅行が、アジア唯一の帝国主義国となった近代日本の国策の大きな流れに沿っていることは、当然であろう⁽³⁰⁾。そして、東亜同文書院そのものの母体である東亜会・同文会に共通するアモルファスな思想であるアジア主義⁽³¹⁾を土台にしていたこともまた、云うを俟たないであろう。

(29)井上雅二(梧桐)『巨人 荒尾精』左久良書房、明治43年9月、41～46頁。この中で、荒尾は「私は元來軍人にて自分の職業上から考ふるに、商業と戦争とは、徹頭徹尾相似たるものに相違ありませぬ、然るに軍事の掛引は、教育よりも寧ろ實地にある」(44頁)と述べ、實際への関心を主張している。根岸の研究態度と通底するものである。同書は、荒尾の意志を継いで東亜同文書院を設立し、初代院長となった根津一が全体を校閲し、さらに荒尾の参謀本部勤務以来、そして日清貿易研究設立以後も関わりの深かった桂太郎が序文を寄せている。なお、本書の奥付には印刷所として博文館が掲げられている。井上雅二は兵庫県出身、東亜会での活動の後、明治31年11月に同文会と合流して成立した東亜同文会では幹事を務めるなどし(『東亜同文書院大學史一創立八十周年記念誌』滬友会、昭和57年5月、49頁)、井上雅二はさらに南洋協会設立にも参加し、南方移民促進活動を行い、また実業家としても活躍した。夫人の秀は日本女子大学校長を務めるなど、近代日本女子教育に尽力した。両者については藤谷浩悦『井上雅二と秀の青春(1894～1903) 明治時代のアジア主義と女子教育』集広社、2019年1月、が最も詳しい。また、井上雅二に関しては藤田賀久「近代日本のグローバリスト井上雅二—その人物像を中心に」(『多摩大学紀要』16号、2014年3月)がある。なお、『東亜同文書院大學史一創立八十周年記念誌』滬友会、昭和57年5月、22頁にも、ここに引用した荒尾の博多での演説が抄録されている。

(30)明治という時代の精神性は、個人の「立身出世」が日本国家の勢力伸長とパラレルに対応し、その共鳴に一人一人の個人が大きな違和感を抱くことが少なかったこともまた指摘しておかねばならないであろう。分かり易い例を挙げれば、この時代を説明するときに引き合いに出される事の多い司馬遼太郎が、1970年代、日本が高度経済成長からドルショック、オイルショックで一定の挫折を経験した時期に描いた『坂の上の雲』(1968年4月～1972年8月『産経新聞』夕刊連載、文春文庫版あり)の諸人物像は、健康な立身出世像と国力伸長を手放しに評価した姿ではない。20世紀への不安と、来し方への悔悟を抱えているのである。そうした、違和感を抱き、帝国主義化する日本への警鐘を鳴らした人々もいたのだから、明治という時代全体が楽天的であったなどと言い切るつもりはない。これは、本稿の主旨とはやや離れてしまうが、アジア主義のとらえ方も重なってくるのではあるまいか。

(31)アジア主義については、竹内好・松本健一などが戦後間もなくからの議論を整理し、論じてきた。そして、それらを踏まえた数多くの研究がある。本センター関連の近年の出版物としては馬場毅編『近代日中関係史の中のアジア主義 東亜同文会・東亜同文書院を中心に』(あるむ、2017年3月)がある。また、嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』慶應義塾大学出版会、2016年6月など、近年の研究のなかで特筆する価値のあるものといえよう。なお、上述の諸研究でも論者によってアジア主義の定義が必ずしも一定しない。そうしたことから考えても、筆者は近代西欧に対してアジアが一体となり抵抗するが、そこでは常に日本がリーダーシップを取ることを運命付けられているとした自己認識が土台にあるアモルファスな考え方、と大枠で見えておきたい。なお、趙軍『中国における大アジア主義：「聯日」と「抗日」のあいだ』ミネルヴァ書房、2018年6月は、日本のアジア主義への中国からの反応について検討している。

第18期旅行記念誌『粵射隴游』に「卒業大旅行」の計画と指導にあたった教授馬場鋏太郎⁽³²⁾は旅行への思いを述べている⁽³³⁾。

凡そ生を人生に享くる者其時と所とを問はず人類文化の発展の大業に参し、身に応じ、分に従ひて努力するの覚悟あるを要す。吾人が支那大陸の開発経営に資するに当たりても亦文明の潮流時勢にの要求に順ひ、物質的及精神的両文化の円満なる発達を期待せざるべからず。然るに我が邦人の真に支那を解するもの極めて少なく、支那と言へば直ちに荒寥たる僻陬を連想し、或は一獲遺利を拾ふに適すと思惟する者比々皆然り、之れ固より。不究者自身の罪たりと雖も一は亦我が邦に於ける調査研究の寂莫たりしに帰せずんばならず。

惟ふに支那に関する邦人の研究は日支両国の関係上頗る古くより行はれ、殊に近時に至りて著しき高潮を呈し学者、政治家、実業家等職業階級を通じ相競ひて之が研究に遅れざらん事を勉むるに至れり、然れども其範圍未だ漢籍の外に出でず、或は西人著書の抄訳により、その糟糠を甜むるに止まる。

千言満語口に日支親善を唱へ、唇齒輔車、日支共存を論ずるも其実の挙がらざる寧ろ当然なるべく、今や更に具体的日支親善案の論議を見るに至れり。

然るに支那研究の道程如何、固より一言にして尽し得ずと雖も親しく風俗、習慣、物情、民意の機微を究め人心の趨帰を察し支那は謎題なりとして不

究の罪を糊塗せんとする従来の弊習を打破するにありて其第一着手としては須らく先ず地理の研究に起り、親しく其地の視察調査に志を要す。

松陰先生の所謂「地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を論ぜんと欲せば先ず地理を審かにせざるべからず」所以爰に存す、我が東亜同文書院夙に見る所あり、毎夏上級学生を十数班に分ちて禹城の南北を周遊せしめ、親しく地理、人情、習俗の機微を究めて日支提携の先鋒たらしめんとし、よく支那事情研究の資料を蒐集して剩す所なし。

昨夏第十八期生を分つこと二十、三伏の溽熱を冒し、足跡本部十八省に遍ねく更に内蒙、東三省に及ぶ、眩漠陰阻の地を過ぎ、艱苦欠乏の厄に耐へ、長途或は魂を驢騾の孤鞍に驚かし夜半夢を木舟の中に破り、旅宿孤燈の下に視察を随記し帰來編して紀行成る。

予書院に職を奉じ旅行計画の任にあること年あり毎夏各地を巡遊するに当り親しく各班辛苦の実況を目撃し私かに感激の意に不堪、聊か感想を舒べて序に代ふ)

なお、書院生の卒業大旅行そのものに関しては、本記念センターの設立者でもある藤田佳久による膨大な研究があり、書院生が活動範囲を拡大していった期間について、その行動範囲や調査の概要に関してすでに整理されているといつてよい。そして、その意義は一般書の出版などにまでこなれ、学問的にも社会的にも評価されていると言つてよい。しかしながら、同一地域の時間的経

(32)馬場自身、書院第5期の卒業生であり、根岸侘より直々に教授された旅行次第を、地理学者としてさらに拡大していった(藤田佳久『東亜同文書院中国調査旅行記録 第三巻 中国を越えて』愛知大学、1998年11月、iv~v頁)。

(33)藤田佳久『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(大明堂、2000年4月、299~300頁)。



内モンゴル自治区地図（『当代中国的内蒙古』巻頭折り込み地図）

過を踏まえた定点観測、あるいは日中戦争激化などの理由から活動範囲が制約を受けていった時期などに関しては、まだ十分に試みられては来なかったのではないだろうか。また、書院生による「報告書」については、「若き学徒の手になる実質上未完成の草稿であり、その記事の取り扱いには細心の注意を要する」⁽³⁴⁾ものである。その意味で、次に述べるフフホトを中心とした再調査・再読は一定の意味を持つものと考えられるのではないだろうか。それはまた、「中国を各分野から調査研究し、それらを相互に有機的に連関させることによって、地に着いた中国像の統一的把握を試みようというものであった」⁽³⁵⁾という谷光隆の評価を確認

する作業でもある。

II フフホトの歴史地理学的位置と書院生の卒業大旅行

書院生による卒業大旅行とそれに由来する調査報告書の再読の第一歩として、フフホトを中心とする「内モンゴル自治区」とその周辺の再踏査を想定している。そのために、本稿では地域としてのフフホトの持つ意味を、歴史的に検討することを目的としている。

書院生の卒業大旅行では、しばしば「中国」から内陸アジアへの道を歩んだことがあった。その際、彼らがたどった道は、ほぼ全てが現在の内モンゴル自治区の「区都」⁽³⁶⁾となっているフフホトを通っている。

(34)谷光隆編『東亜同文書院大運河調査報告書』愛知大学、1992年3月、41頁。谷による解説より。

(35)同前書、43頁。

(36)「内モンゴル」の「内」はそもそも漢族世界から見た場合の中心から近いかどうかであり、「内」についてはモンゴル世界全体から考えれば「南」となるのであり、その場合はモンゴル民族分断の象徴ともなる。本文中でも触れたが、モンゴル国（Монгол Улс）が「外蒙古」とされてきたのも、同じ理由による。本稿の本来の目的からはやゝ逸れるが、現在の中国における「区域自治」の本質が奈辺にあり、普段は中国研究にあってあまり使われることのない「区都」なる表現も、同所において本来の意味

【フフホトの位置】

モンゴル語で「青い城」を意味するフフホトは、地図に示したように、現在の内モンゴル自治区⁽³⁷⁾のほぼ中央部に位置し、隣接する漢族世界である山西省の省都太原からは200キロほどの距離にある。フフホトの歴史は鮮卑の南下にまでさかのぼる。鮮卑族はいまでもなく、モンゴル系遊牧民族であり、北朝を形成し、隋唐帝国を構築した。「中華帝国」の栄光を担った「非漢民族」である。現在は、漢族に吸収されて「消滅した」とされている⁽³⁸⁾。モンゴル系民族が、漢族の文化に進んで飲み込まれ、同化してしまったというのである。さらに、モンゴル帝国という初のユーラシア国家の時代には、この地は漢族世界ではなく、より開かれた西方世界への入口であった。その後、チンギス=ハンの末裔達がこの地で興亡を繰り返し、漢族の影響力が明確に伝わってきたのは、

漢族王朝では明代にあたるアルタン=ハンにまでさかのぼる。遊牧の民であったモンゴル人達が、この地に浸入してきた漢人を定住させるために築いた町であり、モンゴル族が築いた漢族の慰撫の地であり、接点であった⁽³⁹⁾。また、内モンゴル自治区そのものなり立ちを考えると、日本によって一時期「東部内モンゴ」あるいは「蒙疆」と呼ばれたホロンバイル、清朝が「満蒙連合政権」として成立することに深く関わるチャハル⁽⁴⁰⁾、そして現在では新疆ウイグル自治区と境を接するアラシャン、という大きく3つの部分から構成されている。もちろん、ゴビ⁽⁴¹⁾を挟んで北にあるモンゴル民族が圧倒的多数の人口を占めるモンゴル国が、漢族からは「外モンゴ」と呼ばれ、その言説をわれわれ日本人の多くがほとんど無批判に用いてきたこともまた現実である。この点は、20世紀前半にこの地を訪れた書院生も同様

での「自治」が行われているか定かではないがゆえの留保である。また、モンゴルそのものも「蒙古」と漢字表記をすれば、マイナスの価値判断を前提とした表現であることは言うまでもない。それは、「無智を啓く」を意味する「啓蒙」という近代合理主義が進めてきた思想的営為の表現を考えれば、一目瞭然であろう。研究の出発点としての基本的なスタンスを、できうる限りの価値中立を追求する点に求めるならば、人文の学あるいは社会科学に関わる諸学問は、筆者の専攻する歴史学を含め、様々なイデオロギーから距離を置こうとする限り、こうした問題を避けることはできない。それは、国民国家を形成してきたナショナリズムというイデオロギーも例外とはなりえない。とまれここでは、研究の意味を考える事が目的であるので、そうしたスタンスに忠実でありたいと思う。

(37)内モンゴルが「自治区」となったのは1947年、中華人民共和国の成立が1949年であるからその2年前である。「民族区域自治」が中華人民共和国の基本方針であるが、新たな国家成立前にすでにこの地域が中国共産党の統治下にあったことを意味する。これはこれで重要な研究テーマであるが、ここでは歴史的年代を見る場合に容易に生じうる疑問を呈するに止めておく。すでに多くの先行研究もあり、また中華人民共和国の民族問題、国境認識問題と不可欠な事柄として、基本認識として目を背けてはならない事実関係であろう。

(38)筆者は、フフホト再踏査の準備として、昨2018年8月、フフホトを訪れ、その際、鮮卑帝国の都とされた「盛楽」の故地に建設された「鮮卑博物館」を見学する機会があった。これは、そこでの展示説明による。

(39)『当代中国的内蒙古』当代中国出版社、1992年5月、19～21頁。

(40)1636年のチャハル征服がチンギスハーンの玉璽（それが本物であるかどうかは問題ではない）の獲得を意味し、それがそのままモンゴル世界の帝王を意味したことは、常識に属すると言ってよいであろう。そしてそれは、清朝の版図が遊牧世界と農耕世界に跨ることができるきっかけとなったのである。さらに、これは現在の中華人民共和国が主張する国土と重なってくるのである。

(41)モンゴル語であるゴビ(Gobi)は、漢字表記すれば「戈壁」であり、明らかに当て字である。意味するところは、砂礫を含むステップであり、砂漠とは異なる。従って、一般に「ゴビ砂漠」と表記することがあるが、正確ではない。ただ、漢語では「沙漠」であり、「水が少ない」ことが要件であるために本来異なる概念である「ゴビ」と「砂漠」とを混用しているのである。これと同様に、「モンゴル」を一体ものとしてとらえ直す必要性は、無反省に「内・外」と方角を考えずに区分する方法論を批判的に直す契機であり、「一带一路」を中国が掲げている現在、益々必要な視座であるといえよう。

であったと見て、差し支えあるまい。それはそれで、時代の制約でもあり、その事で彼らを過剰に非難すべきではもちろんないし、それが本稿の目的ではない。しかしながら、一体としてのモンゴル世界像を念頭に入れておくことは、当時の調査を再読し、あるいはその現代的意義を考察するに際して、消して無用なことではないはずである。

さて、フフホトを訪れた書院生は、とりわけ蒙疆政権時代にはその政府に勤務する日本人スタッフ、つまりは多くが同文書院の先輩たちのもとに顔を出し、時に旧交を温めつつ、様々な便宜を図ってもらった⁽⁴²⁾。これは、書院生の卒業大旅行に際して、他のコースと同様であり、すでに卒業した先輩たちが外交あるいは商務関係の業務に就いている場合には、当然の挨拶であった。彼らは、そこで旅行の意義を語り、自分たちが歩いてきた土地の様子を、これから歩いて行く土地への想いを先輩達に告げた。そして、先輩達からは過去の経験と現在のおおよその様子を教示されたのである。

フフホトは、旧時、清朝政府・民国政府の時期には「綏遠」「帰化」の2つの町を合わせて「帰綏」と呼んでいたことから分かるように、北京から見た場合の漢字表記の地名を二様に持っていた。ともに、上記の一体としてのモンゴル世界という視座から見れば中華世界との接点、それも屈服させられ

ての接点を意味する表現である⁽⁴³⁾。

【書院生旅行指導の実例……上田信三】

ここで、書院生の旅行に際し、指導に当たった教員の実例を挙げてみよう。指導教授上田信三による「大旅行指導調査旅行日誌」⁽⁴⁴⁾である。この時、上田は7月1日に上海を出発し、南京—蚌埠—徐州—済南—青島—北京—張家口—大同—厚和(フフホト)—包頭—コンドロン廟—大青山炭坑—包頭—北京—釜山—下関に8月19日着という行程、かなりの強行軍で巡迴している。書院生の場合と異なり、彼らの視察などが順調にいくよう手配することが目的であり、そのために各地の関係者と会っておく必要があった。

まず、出発に当たって馬場欽太郎・内田直作・宮下忠夫ら書院教授とともに南京に赴き、書院卒業生と懇談、さらに同窓会諸氏との会合を重ねる。その後、南京では三井洋行、北京では東亜研究所黄土調査班と懇談、三井洋行北京支店などを訪れた後、7月21日から「蒙疆旅行」準備にかかった。22日に張家口に到着した一行は、23日には善隣協会副理事、24日には蒙疆銀行副総裁、さらに北支方面軍調査班矢野少佐に会い、「徳化スニット方面の情況」を聞いた。少佐の言では「本年は異状な大雨の為奥地は道路も悪く家屋も壊れ当分旅行は困難なる由」、蒙疆

(42) こうしたことは書院生の「大旅行」では通例のことであり、特に大書するほどのことではないかも知れないが、「大旅行」そのものが当初、外務省の補助金で実施され、中国現地では地域政権との関係が保持されなければ不可能であったこと(藤田佳久『日中に懸ける』参照)から考えれば、当然の「挨拶」と見なすべきである。また、書院生の「大旅行」も彼らの苦難は現在の旅行とは比較にならないにしても、単なる民間人による冒険旅行や探検ではなかったこと、すなわち官の保護が前提とされていたことを等閑視してはならない。なお、外務省からの補助金については、『東亜同文書院大学史』滬友会、昭和57年7月、189頁等にも言及がある。

(43) 「綏遠」は「遠方を綏撫する」ことであり、「帰化」は「王の徳化をしたってなびき従う」ことであり、明代以降の名称である。清代に帰化城の西南方に軍事拠点として「綏遠城」を置き、両者を合わせて「帰綏」と呼んだ。これが、現在のフフホトである。軍事的政治的優劣関係が、道徳倫理的色彩を帯びて地名の漢字表記に表現されている。

(44) 上田信三「大旅行指導調査旅行日誌」(年次不明、前掲中国国家図書館『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第76巻、231～251頁)。年次は記されていないが、内容から判断して昭和14年前後のことと思われる。上田の旅行に関しては、この資料による。文字通り「手稿」の覆刻であり、万年筆書きと判断できた

聯合委員会産業部野尻顧問に会った。実際、25日に雨の中トラックで張北張北に向けて長城線を越えると間もなく通行不能となり、結局北京に戻っている。翌26日、列車が厚和一包頭間で「出水のため不通」との情報を得た。この日、軍特務機関⁽⁴⁵⁾長下永中佐、察南政府星野顧問と面会。27日、午前7時50分、漸く張家口を出発、「物凄い土砂降りが一日つづく。河川は至る処氾濫」午後4時大同着。翌日、列車全線不通、29日、フフホトまで列車開通。30日、善隣協会前川理事、烏蘭察布盟山本顧問、軍特務機関を訪れる。31日、巴彥達拉盟小池顧問に会い、百靈廟へ移動。途中の風景について印象深く記している。8月1日、百靈廟にある日本関係機関である軍特務機関、烏蘭察布盟公署、蒙疆公司を訪問。2日、特務機関の車で「シラムリン廟」往復。3日、軍のトラックに便乗、フフホトに戻る。一日休養の後、5日、列車で包頭に移動、満鉄出張所、総領事館などで所員卒業生と会う。その後、7日に東亜研究所黄土調査班徳永博士と合流、10日にフフホトに戻り大同へ、11日張家口、その後17日天津発、列車で釜山へ、19日帰国。総額661円30銭の経費であった。

大づかみで見ると、日本統治下の華北一内モンゴル旅行であった。出発地である上海および南京だけでなく、途中立ち寄った蚌埠⁽⁴⁶⁾も日本軍の勢力範囲であった。さらに、張家口からフフホト、百靈廟、包頭と、同様の地域が展開する。それぞれの地域で、三井洋行、軍特務機関、各公署にたちよって情報を入手しているだけでなく、移動にあの政権⁽⁴⁷⁾が、日本との関係の中で置いた

たってはそれぞれの機関の手を借りている。しかし、そこで暮らしているのは紛れもなく「老百姓」であり、書院生が手探りで入り込もうとしたのもその世界であった。

指導に当たる教員が、先回りするようにそれぞれの地域に赴き、現地の諸機関に話を通しておくことは、書院生の安全確保の為には必須の条件であった。情勢が緊迫すればするほど、そうであったはずである。

書院教員による指導日誌は、上田以外にも宮下忠夫・福田勝藏・内田直作などが現存しており、書院生の報告書と合わせて、さらに緻密な読込が求められる。同様に、各種報告書もほとんど手つかずのままである。今後、こうした資料の読み込みを深めることを課題としてあげておく。

結びにかえて

最後に、今後の研究を進める為に行った昨年夏のフフホト行について報告を兼ねて述べておきたい。

2018年8月24日：北京での資料収集の後フフホト入り。

25日：フフホトのシンボルである白塔近くにある、旧「白塔」駅。ここは、書院生がフフホトを訪れるときの下車駅であったが、現在は貨物線の取扱駅。旧駅舎は、線路を外されて塀の中、立ち入り禁止状態であった。(写真1.2.参照)

26日：綏遠將軍府衙署。ここは、旧蒙疆政権、モンゴル人達は蒙古連合自治政府と呼び、漢語表記徳王(テムチュクドンロブ)軍事、行政の中心であった。さらにさかのぼれば、清朝の出先機関でもあった。(写真

(45)言わずもがなではあるが、「特務機関」とは軍事行動に関わる非軍事活動で、宣撫工作、住民統治などを行い、情報活動はその一部である。従って、「特務機関」＝「スパイ機関」というのは、あまりの短絡である。スパイ組織であるなら、所在する建物に「〇〇特務機関」などと看板を掲げたりはしない。

(46)蚌埠には、日本の百貨店の外商部があった(『松坂屋70年史』松坂屋、1981年5月)。酒保との関係が考えられるが、まだ不詳の部分が多い。同様に、蘇州には大丸が店を構え、「清郷記念大廉売」をやっていた(『清郷旬報』)。

(47)徳王に関しては森久男『徳王の研究』創土社、2000年5月、同訳『徳王自伝：モンゴル再興の夢と挫

3. ～5.参照)

27日：盛樂博物館。鮮卑の古都。現在は、乳業メーカー「蒙牛」の工場が近くにあり、緑化のモデルとなっている。旧時、漢族世界へ南下する重要な交通路の入口であった。

この間、内モンゴル大学関係者と懇談を重ね、プロジェクトの推進について検討した。そして書院生の行ったフィールドワークの成果を21世紀に生かすため、その再踏査と総合化の必要性、理論化の意味を確認した。具体的には、東亜同文書院の戦前中国に対する研究の「遺産」を生かすため、同時に書院生の卒業後の研究者などとしての足取り⁽⁴⁸⁾を再確認するため、本校でも一部名を挙げた満鉄調査部、東亜研究所、さらに戦後のアジア経済研究所、農業総合研究所などとの関わりを検討していきたい。

写真1：「PAITA」の文字が見える



写真2：旧白塔駅舎



写真3：1930年代



写真4：2018年



写真5：將軍衙署・漢字とモンゴル文字



折] 岩波書店、1994年2月、参照。

(48)必ずしも研究者ではないが、雲南・ベトナムなどに足を伸ばした弘前出身の米内山庸夫は『蒙古風土記』改訂社、昭和13年8月、を出版し、書院生がたどった道を彼の卒業後にまたたどっている。なお、同書は、中国における外国の中国研究関連書物である内蒙古大学出版社より2012年12月、「「十二五」国家重点出版规划精品项目」の1つとして復刻刊行された。